

南朝造像記の研究

——資料と概要——

八 木 宣 諦

北朝造像記銘文の内容については既に仏教史的研究がなされ、文字書風については書道史的方面から研究が進められ、また造像の形状や装飾など造形美術的な研究も進められてきた。⁽²⁾しかし南朝造像記については遺品が少なく文献に収録したものも少ないので、⁽³⁾南朝造像記に関する研究論考は殆ど見られない。一般に北朝は国家仏教、南朝は貴族仏教という性格づけがなされ、北朝では教団が国家の強力な統制下にあったのに対し、南朝では貴族勢力によって皇帝権が制御され、教団に比較的自律性があったといわれている。

南朝でも各皇帝が仏教を崇拝したので仏寺が盛んに建立され、梁の武帝代には仏教が最も隆盛となったことは『弁正論』により知られ、金銅仏がかなり造られたことが窺える。

また書道史的に見て、南朝にも北朝書法へ影響を与えたと思われる蕭憺碑等があり、南朝の優れた書法の墓誌が近年出土して南朝楷書の多様さが知られることから、造像記もある程度

は造られたであろうと推測できる。

筆者は、一九九三、九四年にかけて台北中央研究院で、仏教墓碑銘拓本（北魏—元）の調査研究に従事する機会を得た。⁽¹⁾その折南朝造像記の拓本を閲覧することができたのを機に、他の収藏品、中国の出版物に収載の新出土の造像記、既出の文献等より収集して七三件を収録することができた。仏像遺品や写真資料のないものもあつて形態的特徴は不明な点も多いが、拓本があれば造像記の内容、書風の研究も可能である。

本論では南朝造像記全体の資料を掲出し、銘文を中心に南朝造像記の実体、特徴を考察しその概要を記してゆきたい。

北朝の造像記銘文を整理すると様々な信仰内容が知られる。尊像の種類には、釈迦、弥勒、観音像が多く、観音像は金銅像に集中している。また阿弥陀像は北齊からで、北魏には無量寿仏の名で銘記されている。

造像記には、発願の動機、奉為、願目が列記されている

五三一	撰山凌長波題名	中大通三	○
五三二	比丘釈僧鎮造像題記	中大通四	
五三三	上官氏造像題記	中大通五	
五三六	宮容造像題字	大同二	八瓊
五三六	殷如玉造像	大同二	
五三六	王春造像	大同二	
五三七	劉敬為母造釈迦像	大同三	陶斎
五三七	応祥造像	大同三	
五三七	菩薩造像題記	大同三	
五三七	侯朗造像題記	大同三	
五三八	陶遷造弥勒造像	大同四	○ ○
五四〇	千仏造像碑	大同六	
五四〇	勝会造仏像題記	大同六	
五四一	張興遵造釈迦造像	大同七	
五四三	柳仲保釈迦造像	大同九	
五四四	陳宝斉造像記	大同一〇	
五四六	釈慧影造像記	中大同元	
五四七	季□造像	太清元	○ ○
五四七	朱異造像	太清元	
五四七	李十九娘造像題記	太清元	江蘇
五四八	観世音造像題記	中大同三	
五四八	梁紀年造像題記	中大同三	
五四九	丁文乱造像題記	太清三	
五五〇	李元福妻鞏造像題記	大宝元	玄美
五五〇	安慶造像	大宝元	八瓊
五五三	華陽県地方造像	承聖二	
五五三	蕭氏無量寿造像	無紀	

これらの資料を基に、仏教史的背景を考慮に入れ南朝造像記の特徴を見てゆきたい。

宋の武帝、文帝は仏教に好意的で、元嘉年中は政治も安定し仏教も盛んとなった。造像記もこの時期に集中している。

(a) 韓謙造像記は

元嘉十四年歲在丑郢丑朔五日一日、弟子韓謙敬造佛像、願令亡父
母婁子兄弟值遇諸仏、常与三寶共会

とあり、韓謙が亡父母妻子兄弟の為に造った金銅如来坐像の造像記で、北朝と同じ様式の定型の銘文である。

(b)は四川省晋豊県の高熊が造った無量寿仏造像で、無量寿仏としては北魏（和平五年）より成立が早い貴重な資料。

(c)は大莊嚴寺の講經を聞いた楊仕有が、その思いを家にもち帰り造った釈迦造像記で、家庭内の持仏信仰。

この他、僧の初期の造像である沙門慧担造像記、南朝で唯

[illegible]

一「為國家」を銘にした関正玄弥勒造像がある。宋には仏寺建立や仏像鑄造が度をこえたので制限を加え、仏像を造るには認可を受けなければならなかった記実があるから、金銅像はかなり造られていた可能性がある。

齊代の造像遺品は少ない。紀德真が四川省彭水の喪思寺で亡弟僧惠の為に造った釈迦造像記や釈玄嵩の造った無量寿、弥勒二像の造像記が貴重な資料となろう。

南朝で仏教が最も盛んだったのは梁代で、『弁正論』卷三には寺院数二八四六所、僧尼八二七〇〇人と記されている。

武帝(四六四~五四九)は天監一八年に慧約より菩薩戒を受けて以後、大愛敬寺、大智度寺、同泰寺等多くの寺を建てて名僧に仏典を講経させ注釈をさせ、自らも仏典を研究し講経もし著述を書いている。また道俗を集めて無遮大会、平等会等諸法会を催した。中大通元年の無遮大会には道俗五万人が参加したと伝える。梁代、特に武帝授戒以降に集中している。

(d)は四川省綿陽にある漢の平陽府君北闕の一部を用いて刻された章景造像記である。梁帝の為に無量寿仏碑像を造り、無形と形を對比して老莊的仏教理解を示した造像記としては難解な文である。上部二字分が欠落して文意は会得し難いが貴重な資料である。

(e)は四川省博物館蔵品の上官氏造像記⁽⁹⁾
：敬造釈迦文石像一丘、願令玉尼□往生遇值生西方無量寿國、捨

身堯形常見諸仏周□出家及現在之眷屬六身中來一切倉生並同此願
七尊二羅漢の群像で、西方無量寿國に往生して見仏することを願目とした弥陀淨土教徒の造像記と考えられる、

(f)柳仲保釈迦造像記

：武帝大莊嚴寺設平等会武帝回捨身、於同泰寺昭明太子常常講
經念仏、於同泰寺仏弟子柳仲保回家約同衆姓弟子、敬造仏像三
区、衆姓弟子一心供養仏時……

武帝が大莊嚴寺で平等会を修し、同泰寺で昭明太子は經典講義の講筵をしいた。そこに参加した柳仲保は家に帰り多くの同衆信者と像を造り一心に供養したとあり、武帝一族の奉仏行為を裏付ける資料である。

(g)は李元福妻輩氏の弥陀造像記で、程文德妻王伏素造像記と共に女性弥陀信仰者による弥陀造像。北朝で阿弥陀仏と銘記される最初の造像は北齊武平二年であり、それより早い成立のものとして貴重な資料である。

なお文献にも僧祐が無量寿仏を建造したことや、武帝が大愛敬寺に金銅像を造った記実が見られる。従って梁の造像は武帝の崇仏と共に盛んになったことが認められる。

陳代の造像記は五件と少く、浅い線刻の像と銘文で、家庭内信仰を素朴に表現した感があり、庶民間の持仏信仰の所産であらう。

仏像の像容から北魏仏は素朴剛健であって権力主義の主張が強いといわれるのに対して、南朝のものは優雅な趣きが特徴で、文化様相を異にした背景が考えられる。

南朝には石窟造像、団体による造像がなく大規模で長文の造像記はない。金銅像が比較的多く、堅い材質の素材が乏しかったものかと考えられる。

北朝では孝文帝による漢字化政策によって文字を重視した造像が行われたが、南朝では紙書の文字は高度な発達をとげたが、石灰岩に文字を刻す発想が稀薄だったかと思われる南朝では造像が主体で題記は付属的だった感があり、文字書風も北朝の方に優品が多い。従って金石家も著録していない。

南朝の造像は梁代に集中しており、武帝の崇仏行為が大きく影響したと考えられる。題記銘文から見ると家庭内の庶民信仰が表われ、持仏信仰の所産のものと考えられる。題記も個性的であり、個々の精神を重視した自由表現が特徴といえるのではないか。

これら南朝造像記は先ず資料集成として活字化する必要がある。紙数の都合上、全文の解説と北朝銘文との比較検討は他考に譲る。

1 塚本善隆「竜門石窟に現れたる北魏仏教」(『竜門石窟の研究』)、佐藤智水「北朝造像銘考」(『史学雑誌』八六編十号)

2 石松日奈子「竜門古陽洞初期造像における中国化の問題」

南朝造像記の研究(八木)

『仏教芸術』八四号)

3 『八瓊室金石補正』には維衛尊仏造像記等六件の収録

4 拙稿「中央研究院所蔵の拓本資料」(『書学書道史研究』四号
歴史語言研究所所蔵拓本は三三八八九枚あり、南朝造像記は

一七件

6 『北京図書館蔵歷代石刻拓本匯編』巻二に一五件所収

7 大正大学蔵拓本(塚本靖氏寄贈)中に一〇件所収

8 『成都文物』一九八五年一期八七年一期

9 『中国美術全集』雕塑編三

〈キーワード〉 南朝造像記、梁武帝

(武蔵大学講師)

新刊紹介

桜部 建・加治洋一 校註

新国訳大蔵経 インド撰述部 毘曇部一

発智論I

A5判・三四八頁・定価九、五〇〇円

大蔵出版・平成八年二月